

明治三十年代の作文教育

「白杵 中学校友会雑誌」(第四号)のばあい

利 満 裕 美

はじめに

「白杵 中学校友会雑誌」第四号(大分県立図書館蔵)は、明治三十四年四月十九日に発行された。奥付によると、本号の編輯兼発行者は野上豊一郎氏となっている。この野上氏は、言うまでもなく、能楽研究者・英文学者として知られている野上氏のことである。野上豊一郎氏は、明治十六年九月、大分県臼杵町に生まれ、臼杵中学・一高を経て、明治四十一年七月、東京帝大英文科を卒業された。翌明治四十二年から、昭和二十五年六十七歳で病没されるまで、ほとんど全生涯を法政大学にて育英の道に挺身された。「能・研究と発見」「能の再生」「世阿弥元清」等の能楽研究書、「シユバの女王」「クレオパトラ」などのギリシヤ古典劇の研究書、「お菊さん」「バーナード・ショー」などの翻訳書がある。「白杵中学校友会雑誌」第四号は、この野上氏が、十七歳のころに編輯・発行されたもので、本号のなかには二・三、氏の作品も掲載されており、興味深いものがある。

以下、本誌の紹介を中心としながら、明治三十年代の中学校にお

ける文章活動の実態について若干の考察を加えていきたい。

一、「白杵 中学校友会雑誌」第四号 目次

○校友会の事業に就き有志家諸君に訴ふ

論 説

○大分県人論

特別会員

○倫理大意説話

協賛員

○運算に就きて

協賛員

○詠万巻書山房隨筆

協賛員

○英語訳解心得

協賛員

(1) ○写真術(特別会員 共述)

○二十世紀を迎ふ

四年生

○志あるものは必ず成る

四年生

文 苑

○是ぞ臼杵の中学校

協賛員

(花の園)

是ぞ臼杵の中学生

協賛員

協賛員

○愛竹説

四年生

(4) ○秋日偶成

四年生

○新春

四年生

○羈旅雜詠

三年生

文 の 林

○An Excursion

協賛員

○児島三郎

四年生

○小川の流れ

四年生

(5) ○あかつきの鐘

四年生

○大泊の垂釣

四年生

(6) ○雪年の探梅

三年生

○噫ヴェクトリヤ陛下

三年生

○秋の臼杵湾

二年生

○真男児

二年生

○おくつき 協賛員 二年生

(2) ○砧 三年生

○夜千鳥 (やまとにしき) 三年生

○月前梅 (外四首) 三年生

(3) ○歌反古 四年生

○雪月花 四年生

○旅のすさび 四年生

○残櫻 (外三首) 四年生

○春夜 四年生

○寄知巳贖并紀行雜詠協賛員 四年生

雜報 質疑応答

○知徳體を進むる方法協賛員

(7) ○發明 二年生

○雪見誘引の文 一年生

(8) ○観梅誘引の文 一年生

○月嶋丸遭難者の遺族に送る文 一年生

○友の小成に安んずるを励ます文 一年生

○衛生に就て質問する文 一年生

- 第四回演説会(旅行觀察談)○大分中学生の来白○鬼狩○聲劍仕合
- 職員異動○来信束○寄贈書目○補助員会費領収報告○会友諸君に告ぐ○名誉会員氏名○臼杵中学校校友会規則○校友会役員
- (9) ○第五號に掲載すべき課題○投稿者注意
- 附録
- (10) 明治三十三年秋期修学旅行日記
- (注) 以上(1)~(10)は、便宜上、筆者が付けたものである。なお、奥付は、つぎのとおりである。

校友会雜誌第四號
 明治三十四年四月十六日印刷
 明治三十四年四月十九日發行
 編輯兼 大分県臼杵中学校内
 発行者 野上豊一郎
 印刷所 岐阜市笹土居町四丁四番戸
 安田印刷工場
 發行所 大分県臼杵中学校内校友会

明治三十三年一月十七日内務省認可

二、内容の概観

目次によれば、作品は三部門にわかれている。論説、文苑(韻文)、文の林(散文)である。

論説では、大分県人の意気を述べると思えば、世界に乗出していく日本を、新しい世紀を謳う。変化があってもしろい。運算、英語の話もある。写真の話もある。

文苑では、七五調詩、和歌(万葉假名を用いたものもある。)漢文、漢詩等。

文の林では、擬古文、漢文調の文、また典型的なこの期の範文模倣文。さすがに上級生の文は、かなり自分のものにした文である。

一年生は、範文模倣文を少くともこの文集では要請されたい。(これについてはまた後に説明する。)

最後に附録があるが、これは当時の修学旅行のようすが知られて、なかなか興味深い。この場合、最上学年だけが行く現在の修学旅行とは異なっていたようである。

三、資料とその考察

以下(1)~(10)の番号を付したものを書き抜いて若干の考察を試みたい。(表記は原文のまま。ただし、漢字は新字体に改めた。)

(1)写真術 補助員 東戸策 長澤美速 共述

Scientificの事を本職とせる人が、文学の趣味がないと、人間が偏屈になると同じ様に、文学、法律、政治、などやる人々がScienceのTasteがないと人間が粗雑となるといふは、真理としても好かるうと思ふ、識者は之を認めて居るらしく、高等学校の文科一年に数学があり、三年に動物の課してゐるのは其故であらう。

Scientific application)の中で、最も通俗的で興味ある事は、写真術である、それは自分の愛する人の顔を、甚低に顕し、三百里も距つて居る東京に居ても、その顔をしつて居て、見る事も出来るし、懐しき野山の景色をありのまゝに写す事も出来るし、美なる花、艶なる容姿、壮なる景色を art をうまくやれば、一層美艶、に而も室内で賞する事が出来る。是れは写真術の効能を決して exagere ate して言ったものではない。成る程写真には費用はかゝる、僕の如きあまり富裕にない方の書生は、或は少々負担が重すぎるかも知れないが、併し芸者買をするとか、何とかやるに比すれば遙に上品で、而も経済的である、殊に弊害がない、故に僕は人々に写真術を始むる事を勧告する、理学者、工学者よりも、宜しく文学家、法学家に切に勧むる。僕の英語の教師であった、山川博士の如きは、熱心家で然も熟達して居られる、写真の手法は、初心者には可なり複雑に感ずるかも知れない、併し少し経験すれば何の事はない、其の詳細の事は寸美遠君に頼る事とする(以上東生)

東戸策兄が前文の如きものを寄越して、僕に写真の大略を説きあかしを書き添へ、御会の雑誌に投書を頼むといつて来た、兄は自分が暇が多いから僕までもそうかと思つて居られるらしい。まづ悪口はよす事として……………

僕は写真術には非常に未熟である、で拒絶せうかと思つたが、日頃より投書を促されても居る事であるから、其申訳までもと思つて来た事を参考として極大略の説明を始めやう、只写真の如何にして製せらるゝかを了知してもらへば、それで僕の本意なのである。

○写真術とは或光線の作用をかりて、感光面に化学的变化を起さし

め、そうして其実物比較的類似して画像を製作する術を称して云ふのである、先づ写真機(カメラ)のあらましを話して置かう。

○写真器機は、暗箱、鏡玉、取枠、三脚台、及び焦點布とで consist ed して居る、暗箱の字の示して居る通り暗き空箱で、前面には「レンズ」があり、後面には乾板 (dry plate) と同大の「磨硝子」を支へて、且つ此両者間の距離を縮伸させる事の出来る成て居る、そうして焦点を合せ、画の位置が定つた時に、その磨硝子と dry plate とを交換するしかけとなつて居る、取枠は即ち此時に必要なものである、三脚台とは、暗箱を載せたる台で、焦點布とは焦點を合するに当り、後からの日光を遮断する為に用ふる、黒の天鵝絨に緋金布の裏の附いた三尺四方の布である。

○「レンズ」は種々あるが俗に万能「レンズ」と称するが宜しい、五拾円以上のもなら一寸使へる、千円位になると随分精密である。

○勿論器械には十余種あるが「ガビ子」形と称する凡そ半紙の四分の一大の使用する人が多い様だ、實際吾等には適當して居るものである、あまり器械の安価のは興味が少ないから出来るだけ高価のを選び給へ、

○次に暗室である、元來 dry plate は極めて微弱なる光線にも作用を受くるから dry plate の処理は是非とも暗室内でしなければならぬ、併し大抵の人は戸棚又は押入の中に、赤色「ランプ」を携つて、dry plate を取枠に入れ、或は現象するのである、それも夜間のみ之をすれば、暗室を設くる事もなしに進行して行かれる。

○dry plateにも色々あるが初学者には marion dry plate 又は Ibford dry plate が適當するぞうだ。

○以上の準さへしてあれば自身の欲する何時でも写影が出来る。
 今、土曜なり日曜なり、写真器械の一具と数枚の dry plate を挿入したる取替とを携へて、戸外へそろ／＼出かけるのである、するとまだ数歩を進まない内に、天然の美、人為の巧は皆好題目として吾等の妙技を待ちうけて居るので、其時の愉快は勃々として禁ずるを得ないのだ。

○爰に大切なのは、dry plate 露出の時間で、之は実にやかましい、始めの内は実にうるさい様だ、併し写真の上手下手は実はこの露出時間と、後の現像法との手練如何に依るのである、露出時間には、季節、時刻、「ミドリ」の大小、勿体の如何により各々長短がある。また乾板の種類即ち ordinary, rapid, instantaneous などに依りて異なる、ordinaryといふのが最も遅いので、快晴の日中に野外で一秒位である。

○光線に当てた乾板を、暗室の中で取りだし先づ現像液を働かせると、物像の黒の部分白く、白の部分が黒く現われる、之を定着液に入れ、光の action を止める、斯して得たものを negative plate といふのである。

○現像液の中で普通用ひらるゝものを紹介せう。(単位は瓦である)

ハイドロキノン現像液 (Developer)

hidrokinone	6.0	}	I
Sodium sulphite	40.0		
distilled water	600.0		
<hr/>			
caristic soda	100.0	}	II
distilled water	600.0		

I 及び II を等分に混じて用ふ

ディアミドフェノール現像液

deamido-phenol	6.0
sodium-sulphite	24.0
distilled water	600.0

右の溶液に臭素加里 (potassium bromide) の水溶液二滴を混じて用ふ、此液は一日より長く畜へる事ができない、併し方今現像液中第一だ、

○定着液とは左の混合液をいふ

定着液 (pinig eath)	
sodium hyposulphite	50.0
water	450.0

○当り前の写真を得るには以上の法にて得たる negative plate を焼杯に入れ、其の裏に感光紙を入れ、光紙に晒して置けば赤褐色の画像が出来る、之を水洗して鉍金液に入れる、すると赤褐色の部が黒色となるから之を又定着液に入れる、定着液は以前の割合より少しく稀薄にして宜しい、取り出して水にて能く洗ひ乾してつやを出し、台紙に張り附ければ之が即ち写真である、鉍金液とは左の混合液である、

鉍化金液	20.0
硫酸アンモニウム	2.0
蒸溜水	450.0

○感光紙は P. O. P (printing on paper) 或は Ariston 言ひて写真屋で売って居る、又鶏卵紙といふのがあるが手数がかかるから P. O. P を用ふる方が手軽で而も綺麗だ。

少々長くなったから、之で筆を収めやう、僕の誤解して居る所は教示を願はふ、惜まず教つてくれ給へ、みんな勉強の邪魔にならな

い様に写真を初めて見るがいゝ、実に面白く且運動にもなる、のみならず僕の為には脳病の妙薬となつた(長沢)

言文一致体の文章は、この文集中、これ一つである。このころ、

つまり明治三十四年発行だから、少なくともそれ以前の言文一致運動はどうなっていたか。久松潜一編「日本文学史・近代(昭和32・6・30、至文堂刊)」を参照すると、そこでは言文一致運動の歩みを

第一期発生期(慶応二年〜明治十五年)

第二期第一自覚期(明治十六年〜二十二年)

第三期停滞期(同二十三年〜二十七年末)

第四期第二自覚期(同二十八年〜三十二年)

第五期成長、完成期(同四十三年〜大正十一年頃)

の六期に区分している。これから見ると、第四期から第五期にかけての自覚期、確立期に当たる。これを具体的な例でみてみよう。明治二十年には四迷の「浮雲」第一編が出ている。遑邇、美妙等の活動も活発である。翌二十一年「あひびき」二十二年以後は西鶴調の雅俗折衷體が盛んとなり言文一致運動は下火になつた。明治二十八年以後国語改良問題がおきるとともに、再び運動が盛んとなり、尾崎紅葉も明治二十九年「多情多恨」には「である」調を採用した。四迷も「片恋」(二十九)、「うき草」(三十)の口語文の名訳を出し、深刻小説を口語文で書いた広津柳浪等がいた。しかし一般には依然として非言文一致体が横行していた。明治三十三年は言文一致運動史上最も画期的な年である。正岡子規は三十三年「鼓事文」の中で、写実に適した文体は言文一致がこれに近いものであると指摘し、高浜虚子が同年「言文一致」を書いて、写生文において

言文一致体を徹底的に実行すべきことを力説した。学会においては、上田萬年、藤岡勝二、新村出、保科孝一等結成の言語学会が機関誌「言語学会雑誌」を創刊、四月号から雑報欄の記事の一切に口語体採用を宣言実行し、三十五年八月廢刊まで絶えず言文一致運動の動きを時報的に記録批判して支援を惜しまなかった。また三十三年三月帝國教育会内に結成の「言文一致会」は四十三年十二月に解散するまで「言文一致論集」の発行、「言文一致の実行に就ての請願」「小学校の教科の文章は言文一致の方針によること」等の大きな仕事を果たした。

「写真術」を共述した東、長沢両君は話の様子では書生であるらしい。さらに雑報の補助員の会費領収報告のところに東京の会費世話人として、長沢君の名が載っている。ということは、彼らは東京に住んでいたのではなからうか、多分そうであらう。だとすれば、そういう文学思潮、言文一致運動の影響は、まともに受けていたであらうから、この文はさして不思議はないかもしれない。が明治三十三年以降が本格的確立期であるにしても、小説界で言文一致体が動かぬものとなつたのは明治四十年中のことであるのを考えると、明治三十三年頃の一般書生の言文一致文は、まれなものではなかつたらうか。「我輩は猫である」は5年後の明治三十八年である。考えてみれば、この写真術の中でも「文学、法律、政治、などやる人々が Science の taste がないと人間が粗雑となる云々」と言っていることから自分達を文学あるいは法律、政治をやる書生と心得ていたものであらうし、写真術という内容も当時の人からみれば、新しいものであらうし、文にちよくちよく用いられている英語はいわずもがなの口語文、こちらあたり関係がありそうである。こ

の時代の先端をいく、ややハイカラ振りの書生、よい意味でも悪い意味でも、どこの世の中にも必ずいるものである。彼らは、時代を背負う首都東京から、半分眠ったような九州の田舎の中学校へ眼ざましにこの文を送ったのかもしれない。この文に当時の中学生が、どんな反感を示したであろうか、たいへん興味のあることである。

次に文苑から(2)砧 (3)歌反古 (4)秋日偶成を掲げる。

(2)砧 三年生 陶山哲夫

霜夜にすぎぶ笛たけの、音もいつしか絶え果て、ふけ行く月は西やまの、鎮守の柱にかげかくし、なくねさびしき梟の、いとすさまじき山下を、かすかに漏る、小夜砧、木枯すさびをりふしに、かはり行く音の哀れさや、夜ごとく打ちしきる、砧の主はそもたれぞ、

(3)歌反古

雪中竹 四年生 野上豊一郎

雪つもる庭の若竹いろにいでて

みどりいやます御代の春かな

さながらに手折らまほしく覚ゆなり

ゆきふりつめる園のくれ竹

(4)秋日偶成 四年生 足立盛夫

仰見東南突兀山 翠紅疎密白雪還

西風殿颯梧桐落 秋色方深籬菊間

(4)について。当時は明治二十七年井上文部大臣によって、国語漢文は一番時間数を多くされたが、それが明治三十四年三月省令三号「中学校令施行規則」により一―五年が七・七・七・七・七から七

・七・七・六・六に変えられるまで続いたはずであるから、当時の国語漢文の目的は、「愛国心育成、個人としての思想交通を自在にし、日常生活の便を給足する」ためであり、その中で漢文の役割は「国語が主、漢文は客なのであるが、国語は元来、漢文によるところが多いから調和を保つようにする、」とある。とすれば当時漢文は従来ほどの漢文一辺倒ではないにしろまだ相当の位置を占めていたと思われる。この文集における漢文の量はあまり多くはないが、生徒も漢文の作文をしている。生徒の英作文というのはまだ一つも見えないことからすると、まだこの中学では漢文がそれほど英語におされてはいなかったであろう。

(2)の砧について。七五調詩であるが、藤村の詩等は大いに読まれたであろう。藤村最初の詩集、「若菜集」は明治三十年に出され、三十一年には「一葉舟」「夏草」が出ており、この一年後の三十四年には「落梅集」が出される。明治三十四年の「中学校令施行規則」で国語及び漢文の内容に「現時ノ国文ヲ主トシテ講読セシメ、進ミテハ近古ノ古文ニ及ボシ……」とあることから、まだこのころの教材ではやはり古文がほとんどであって、明治三十年に初めて「若菜集」が世にでて、その一、二年後にもそれが教科書にとられるとは、現在と異なる状況からも考えられないのだが……。だから多分学生たちは自分で個人的に雑誌や本で吸収したのではないだろうか、それとも学校で何らかの指導が行なわれたのであろうか。この文集には五つほど七五調詩が載っているが、このうち、取りあげた「砧」だけが生徒作で、他の四つは協賛員（先生？）作である。このことから、まだ趣味の範囲を出ておらず、教室で指導して作ったりするものではなかったのでは、という気がする。これが認めら

れるなら、和歌、漢詩に生徒作が大部分を占めているということは、かなり教室で学び作ったのであろう、といえるかもしれない。

(8) について。和歌であるが、明治二十三―三十四・三十五年の国文学発見期といわれる時期と関係はないだろうか。漢文に重点が置かれ、和文はわずかであった時期にも「和歌」は教材となり、学び作られたであろうか。やはり国文、和文が重要視されてきた影響ではなかったろうか。なおこのスマートな句の作者は前述の野上氏である。

次に文の林から学年毎に一つずつ書き抜いておこう。まず一年生(8)観梅誘引の文から。

(8) 観梅誘引の文 一年生 小松国太

拜啓吉野の梅花、昨今漸く綻び初め、例年よりは一入の眺め御座候由、承候、古人の句にも、花は半開酒は微酔と、申す事も有之候、就ては幸ひ明日は日曜日につき、心合へる友人数名と散歩旁々一覽致度午後は定めて群集致すべく候間朝の中に参り候べく、貴兄思召も御座候はば御出掛は如何に候哉、御返事奉待候。尚々昼弁当杯は拙宅にて拵へ置く事に致し居候に付、決して、御心配なされ間敷候様御願申上候、先は御誘引まで。恐惶頓首

例の西尾実氏の範文模倣期の典型的文である。ウカ〜と出掛けていって干乾しにされかねない。読んでみると、これを一体どんな氣持でセッセと書いたのだろうかと思つてニヤ〜してしまふ。昔の人は今の人よりよほど組合わせの文才に長けていたらしい。こんなうまく範文を現状に合わせて改作する能力をもちあわせていたのだから……………。

それはそれとしても、「花は半開、酒は微酔」などと、粋なことを学校で教えたものではある。この文の中で一番わたくしの印象に残ったことばだ。真にいたれりつくせりの誘い文で、わたくしの書くあの無愛想な手紙も、少しはこういうところを真似たいものである。それから目ざわなり漢字が目立つ。手紙独得の言い回わらしものとして、拜啓、御座候由、承候、有之候、致度、候間、御座候、如何に候哉、御返事奉待候、尚々、拙宅、致し居候、間敷候様、御願申上候、恐惶頓首、等あるが一口に候文体とも言えようか。院政・鎌倉・室町時代に男子の日記や記録類に広く用いられた記録文体の変体漢文が、俗語を交えることが多く、文末に「候」を専用するほか書簡特有のきまり文句が出来て、この期に書簡文体が成立した。後世の候文体は、この系統をひくものであるといわれている。

(7) 発明 二年生 首藤 整

新しき発明は、社会に新しき生面を開き、社会の進歩は、更に進歩せる発明を見る、ワットが、蒸氣機関を發明し、ステヴェンソン父子之を大成し、将フランクリンが電氣の作用を考定すれば、忽ちにして、陸に、海に、電信に、電話に、応用せられ、是が多大なる便利と、幸福とを、社会に興へしことは、言ふ迄もあらず、而して社会の進歩は、更に一層驚くべき無線電信の發明を見るに至れり、その他、ダーウィンの進化説が、殆ど生物学を一新せるのみならず、広く、深く、大に十九世紀思想界に、影響を及ぼし、ロベルト、マリエルの勢力保存説が物理学の基礎を一変せる如き、著しき發明、発見、能く十指の屈する所にあらざるなり、かゝる科学上の新説發明は、著々人事を利用せられて、精神的にまた物質的に、幾多の改

良進歩を促し、又促しつゝあり、發明と進歩との關係、亦密といふべし、所詮、十九世紀の社会の進歩は、幾多發明の賜にして、此等發明の多くは、欧米人士によりて唱道せられ、我國の如き、北里博士の微生物、田中博士の改良音楽器の外、寂として聞ゆるなし、世界の舞台上立ちしより、三十年の短日月とは云へ、余りに怠慢ならずや、由來、發明発見の如きは、世界的事業にして、色の黄白、地の東西の差あるべきにあらず、二十世紀は引幕切つて落されたり、兵事上に於て、世界の優等国たる我大日本帝國は、智力に於ても世界に優たるを得ざるべきかは。

わたくしたちが習つてきた国語の教科書のなかにも、これと同じ發明発見の話が載つていたと思う。この文には作者の意図がうまく表わされている。最初に、「新しき發明は、社会に新しき生面を開き、社会の進歩は、更に進歩せる發明をみる、」と書き出し、次に發明の色々を出し、こういつた「著しき發明、発見、能く十指の屈する所にあらざるなり」と述べ、「然るに此等發明の多くは、欧米人によりて唱道せられ、我國の如き、北里博士の……の外寂として聞ゆるなし」とくる。そして最後に「二十世紀は引幕切つて落されたり、兵事上に於て、世界の優等国たる我大日本帝國は、智力に於ても世界に優たるを得ざるべきかは。」と結論する。20世紀に向かつて近代化された若々しい日本の意気込みをみるようであり、文の構成がなかなかうまい。最近の日本の頭腦の流出現象や、研究できればよいと、他国から平気で研究費をうけたりする学者の多くなつた現状を思うとき、よい意味での愛国精神欠乏を感じる。ともあれ、当時にかえつてこの文をみると、明治二十七年の文部省令

改正における国語漢文の目的、愛国心育成は成功しているようである。明治二十七年八月、日清戦争がおき、翌二十八年に日本は清國に勝利をおさめた。露・独・仏の三国干渉があつたとはいへ、(あつたことは逆に日本の力を認め恐れたことにほかならないのだが)日本は世界に飛躍的に力を伸ばした。国内の維新後の混乱もようやく落ち着き、海外に目を向けるようになり、眠れる獅子といわれた清國を倒したのであるから、日本はまさに外へ向かつて日の出の勢を得、明治三十七年の日露戦争へと突入することになる。この日本の成長期にあつて、この文はなるほどうなずける。かなり自分のものにした文だと思われる。こんな文にも範文があつたのだろうか？

(6)雪中探梅の記 三年生 加來徳厚

曆はやく青帝の候を報じぬれど、節は未だ到らざればにや、朔風時として白雪を送り、寒威凜々として骨髄透しぬ。此の時に当りて花を看んと欲すれど、只梅花のたよりをまつのみなり、ことに余はいと花を好む癖ありてをりには寢食を忘るゝこともあり。茲年如月某日を卜して、金蘭の学友数名と雪を犯して梅花を吉野に探らんとて、輿に急歩して達すれば、雪甚しく降り来て、飄々として樹梢花を分ず、唯暗香の馥郁として、鼻を撲つのみ。しばらくして天晴れ、雪消江、幸にして両三の紅蕾を南枝に開くを見たり。其態、曩然といと嬌にして、花香輕風に散じ、両袖を薫して、忽、俗塵を脱して、仙境に入りしが如くなり相興を尽して、手を取りて將に帰らんとせしに、幽香一陣鼻を撲ちて、予輩を止むるに似たり。因りて一詩を賦して花に謝して曰く、

十里吟行尋草梅 一溪風送三暗香 来

野橋三渡疎林外、認得花魁幾点開

と竟に帰路に就きぬ。時に遠寺の晚鐘、山を繞りて暮を報じ、宿鶯啞々たり。或は詩を吟じ、或は歌を詠じて、家に帰りしが神心猶爽然として、花中にあるが如くなれば、乃机に向ひて一日の快楽を記しぬ。

たいへんむずかしいことばをたくさん使っている。「作文というのは、田の草取りのようなあたりまえのことに、ひどく特別なことばづかいをするものだな」というのを思いだす。そういう時代のことだから、梅見などわりとあたり前でないことには、こんなに特別なことばを用いるのも当然かもしれない。だがむずかしいことばを使うと、どうも表現がオーバーになる傾向があるようである。この加来君が「いと花を好む癖」があるのはわかるが、「寝食を忘るゝこともあり」だとか、「樹梢花を分ず、唯暗香の馥郁として、鼻を撲つのみ」等々、ほんとう？と疑いたくなるような表現である。約束としてこう書くんだといわれれば、現代の文にだって一応の約束はあるだろうが、何となく「わからんでもないがおかしいなあ」と思う。どうやらこれには範文があるようである。当時、文がうまいというのは、この約束を覚え、これをいかに場に合わせてじょうずにつかえるか、といったことだったらしい。「一日の快楽を記しぬ」とあるからそのつもりで読んでみるのだが、わたくしにこんな経験がないせいで、梅の香に鼻を撲たれたりすることがないので、残念ながらわからない。生き生きとわたくしに伝わってくるものがないのである。加来君が実際もっと楽しい探梅をしていて、こういうことばしか用意されていなかったとしたら、加来君にはまだ

まだ物足りぬところがあつたらうし、これほどではない探梅であつても、こう書くよりしかたがなかったとしたらそれも気の毒だし、どちらにしても不幸なことである。それとも事実を書くことの必要性はあまりなくて、約束のことばで約束通りに書けば、たとえそれが事実にも反していても、近くてもおかまいなしであつたのか。日本語の特質といわれる人称の不在、流通、(大野晋氏のことばに「日本人は話すことばは誰でも通じ合うと思つてゐるらしい。だから自分と相手とをはずり区別しないでいられる。その結果、『おのれ』が一人称にも二人称にも用いられたりする。』というのがある。))それとどこか似ている。話すことばばかりでなく、経験までが誰でも通じ合うと思つてゐるらしい。だから自分と相手、自分と他人との経験を区別もしない作文の範文を作つて安心していられる。

(5)あかつきの鐘 四年生 稲葉武馬

山々は青葉こくなり行き、田の面の早苗も延び出で、何となう夏めきぬる夕。ひとり文机に打向へば、雨さへしめやかにふりつき、よろづ物憂く思はれて、蛙の声も悲しう聞えぬ。そのかみ、芭蕉翁の、古池や蛙飛び込む水の音と、詠まれしも、げにかゝる時にこそと、それさへ物を思はしめぬ、昨日よりふりぬる雨のまだ晴れやらで、十時過ぎる頃、寝につきぬ、まことや、人生一日の勞を慰むるものは、寝にありける。夜半にふと目をさませば、雨だれの音いとかまびすしく、庭の小川の音さへいとど高く聞ゆるのみ。かかる内夜もほのぼのと明け渡り早、寺々の明鐘。遠近の木々の間に伝ひ来て、ねぐらはなれて行く鳥の、声もあはれに聞えけり。五月まつ花橋の木陰に、朝なあさな音づれ来りし郭公も、今朝に限りて、一声の音信もなし。あな無情の雨かな。罪もなき小鳥にさへ、かば

かりなげきをかゝるやらむと、思ふにいとどつれなきに、かすかに聞ゆる鐘の響も、今は消え入る許りにて、いとあはれなれば、そぞろにうれひの雲のたなびき出ぬ。去ぬる年の夏の頃なりき。さる友とちぎりおきて、此鐘の音を合図に起き出で、稲葉の露をうちはらひて、蜂巢葉の花見に出で行き、また来む年なども、共に語りしことも、今はかたみの言の葉とはなりぬとおもふに、袖さへいとどうちしめりぬ。いやしくも男子となりて、世の中に生れ出たる者ながら、かばかりの事に心をくだくろろかさよと、一度は心をはげましかど、なさげの海に生れし者なれば、かく悲しきも理りにやと、思へど更にうらめしきは、このあかつきの鐘なりけり。

やはり一番自分のものにした文章であると思う。むずかしい字も少なく、調子も柔かで、同じ文語体でも前の三者が漢文調であるのに対して、これは和文調である。大げさな、と思うところが無いこともないけれど、よく自分のものにしてゐる。読んでまず気がついたのは、芭蕉の「古池や……」の句と、卒然として後の方で「去ぬる年の……」と出てくる不自然さである。

まず「古池や」の方から考えてみよう。「ひとり文机に打向へば、雨さへしめやかにふりつゞき、よろづ物憂く思はれて……」の物憂いまた物悲しい情景の中で「古池や」の句が、わたくしの抱いていたイメージとは違ったものとして胸に迫ってくる。わたくしは、人も近寄らぬさびれた古池、蛙が飛び込む水の音だけがあたりの静寂をやぶる、「水の音」でとまっているだけに、この静寂を破るものがなおいっそう淋しさを増している、といったふうにしてゐた。しかしこの文の「古池や」の解釈には、「げにかゝる時にこそ」と

いう強さがある。わたくしは、文学の解釈・鑑賞はこれでよいのだ、いやこれこそ本物なんだと思う。わたくしのイメージはあくまでイメージにすぎない。実感でなく頭で作った想像である。彼ののは実感である。他の人がどう言おうと、この実感こそ彼の最高の味わいである。梅雨の頃の雨の物憂さは、日本人なら誰しも経験するであろう。初めて読んだ時は、意外な気がしたけれど、こう考えてくると作者に同意できると思う。

次に「去ぬる年の」以下の文の不自然な突然の出現をみてみよう。その前の文では、「まことや人生の一日の勞を慰むるものは、寝にありける。」であるが、この文はない方がすっきりする。言っていることには大賛成なのだが、何だか寝る言いわけをしてるみたいである。さて「夜半」から「寺々の明鐘」そして「そぞろにうれひの雲のたなびき出ぬ」まで、作者はいったどこにゐるのだろうか。「雨だれの音いとかまびすしく、庭の小川の音さへいと高く聞ゆるのみ」こゝでは確かに寝床の中であろう。「かゝるうちほのぼのと」は光だから寝ていてもわかるだろう。「寺々の明鐘」「声もあはれに聞えけり」「一声の音信もなし」「かすかに聞ゆる鐘の響も、今は消え入る」はみんな耳を働かせればよい。「遠近……はなれて行く鳥の、」「五月まつ……郭公も」「そぞろに、うれひの……出ぬ」は一応想像する以外、目で見えるほかはない。ずっと寝ていたとするとこれらの文はやゝ不自然である。(作文としての続き工合の話であるが、)寺々の明鐘とともに起きて縁側にでも出て見えたたとすれば別だが。好意的には、日ごろ見ていたものが同次元に出てきたのだとも言える。そう考えれば大目にみることできるが、たゞ前のごとく縁側にでもいたとすると、もう少し目に見えたもの

が出てきそうなものだ。たとえば「一羽の小鳥だに見えず」とか何とか。人間はだいたい臭覚、聴覚、視覚とだんだんに印象が鮮明になるものではあるまいか。そしてここで例の「去ぬる年」である。以下は自分の経験から出てきたものに違いない。というのは「遠近……」からのぎこちなさと比べて突如調子が一転してスラ〜と淀みなく文が進んでいるからで、ちょっと意地悪い目を働かせれば「遠近」から「たなびき出ぬ」まで作者はきつと苦勞したに違いない。自分の経験外、自分のタッチしない状況を描くにはとかく人のことばや、どこかのことばを借りてくることになりがちであるし、いざそれを使う段になって、ひねりにひねりまわして、やっと書いてみたが、どうもスッキリしない、ということになる。そんなところではなからうか。次の「去ぬる年」が突然出てきたようにみえ、それ以下の文の流れのよさを、全体から見れば何かチグハグなものにしているのはこのためであろう。またこの「あかつきの鐘」で言いたかったのは最後の「去ぬる年の」以下であろうと思うが、それがしまいの方に、大急ぎでびよこんと顔をのぞかせて終わっているのは残念である。いっそのこと、「寺々の明鐘」以後の「遠近」から「たなびき出ぬ」をカットしてすぐ続けて「去ぬる年」をもってきた方が、作者の意図がはっきりして、印象も鮮明になったのではないだろうか。そして「さる友との明鐘の約束、さる友の死」など、あまりに溟然とあつげなく終わっている部分をもつと鮮明に丁寧に書いた方がよかつたろう。これでは残念ながら、尻すばみの感がある。「うらめしきは、このあかつきの鐘なり」と、まるで明鐘の音の消えるのと競争して書いたかのように気ぜわしく、だいぶ借り物でない感情がちよつと出たかと思う間もないほど消えて惜しい。思

いついた順にダラ〜と並べただけのようでもうちょっと文の構成を考えるよかつた。

(9)◎第五号に掲ぐべき課題左の如し、

一、地理科、生徒各自の郷土誌を簡単に編述して担当の先生に出すべし、

一、作文科、一学年は私用文を、二学年以上は叙事、記事、論説文を適宜の題にて作り六月末日までに担当の先生に差出すべし、

これで見ると、当時、地理、作文の科目があつたことがわかる。

そして作文科目は一年は私用文を、二年以上は叙事、記事、論説文を書かされたらしい。このことはこの号についても言える。目次をみると、一年生は全員「……の文」を書いている。また言うに及ばず、この一学年は新入生である。この号は四月十九日発行であるから。

◎◎修学旅行日割(33年秋季旅行)

十月二七日 本校出発、陸路大分町着泊

十月二八日 大分町滞在(公勇会運動会)

西大分町泊

十月二九日 西大分出発、日出町着泊、

十月三〇日 日出出発、宇佐に至り八幡社参拜、それより汽車にて

中津町着泊

十月三一日 中津見物の上、汽車にて福岡県椎田に着泊、

十一月一日 椎田出発、徒行して小倉市に至り、それより汽車に着

泊

十一月二日 福岡、博多市街見物の上、太宰府に詣り、夜箱崎町に泊る

十一月三日 箱崎、香椎探訪の上、香椎より汽車にて門司市に至り、門司より早鞆海峡を渡りて山口県長門国赤間関市着泊

十一月四日 馬関見物の上、門司に至り、其より鉄路大分県宇佐駅着泊

十一月五日 宇佐駅(長州)発、陸行日出に至り、汽船に塔じて帰途に就く、

途に就く、

福岡旅行隊は第三、四学年で、第一、二学年は大分まで同行し、公勇会運動会応援に参加する。公勇会とは、県立各学校対抗の運動会で、この時が第一回であつたらしい。演技種目は、撃剣、器械体操、徒競争、柔術の四種目で、白杵中学からは柔術を除いた他の三種目に三人ずつ選手が出場した。各学校別に桃色(師範)、緑色(大分中学)、赤色(中津)、紫色(杵築)、白色(白杵)、黄色(竹田)、白茶色(宇佐)、のハチマキを用いた、とある。愉快だったのは白杵の白ハチマキで、これについては、「優勝者の出た撃剣では)別けてすがすがしかりしが、(調子のよくなかつた徒競走の後には)降旗の色を思ひ起してなげなかりき。」とある、その時のようすがマザ〜と目前に浮かぶ気がする。

福岡旅行者は四十余名、大分までの者は一七〇余名であつた。いよ〜福岡へ出発するのであるが、今から六十余年も前の郷土のありさまが知られて、たいへん興味深かつた。こゝでは全部はとも無理なので、国語に少しでも関係がありそうな記事だけ書き出すことにした。

○大分の白木の浜

「ざざれ波よせてはかへす豊くにの

白木の浜に清き白浜」と詠まれし浜

○別府に日出 石垣原

「忠死吉弘参詣道」李紫雲の詩に「豊山尽行見平原、乱石縦横古塞垣、鉄騎不帰春寂々、杜鵑声裡弔英雄」と言へるは即此処ぞ、史に曰く、「大友義統の臣吉弘統幸、屢義統に向て徳川氏(当時関原に大阪軍と対陣せり)に属するの利あるを説きしの義統堅く義に由りて聴かず、慶長五年秋遂に兵を構へて黒田如水の軍と木付に戦ひ、嚙じて石垣原に戦ふ……」と、統幸奮闘して実相寺山に陣せし黒田が先鋒四千の兵を駆けなやまし、が、最後の勝利は遂に其手に落ちず、刀鏖光りて山に満ち、旌旗驕りて谷を蔽ひし処、兵竭き弦絶えて彼は不幸なる百餘の戦士と共に、原頭の露とぞ消えにける。あゝ武士の草むす屍年ふりて秋月寒き石垣原、英雄の夢魂空しく逝いて、山河当年の歴史を語らず、唯鳥雀昔のこゑに鳴くのみ、哀れなることや

○椎田の綱数天神参詣

管公の此地に漂着し給へる時綱を敷きて御座を作りしかばかくは名付けたりとぞ社前に一の松ありて其の下に石碑ありて公の歌を刻せり其の歌に

おきつ風ふきこす浜に生ひそめて

色そふまつは幾代へぬらむ

○汽車で小倉へ福岡に至る途中

箱崎で

風まじり降り来る雨に

箱崎の松の木群の音さわぐなり

(四年生 狭間)

○福岡の西公園(荒津公園)にて

荒津山我わけゆけば朝とでの

袖につゆおくけさの旅かな(鶴野上)

○筑紫郡水城村 水城趾にて

村の右手に長く連れる土堤あり、日本書紀に曰く、「天智天皇三年、皇歳於対馬嶋壺岐嶋筑紫国等、置防興烽、又於筑紫築大堤貯水、名曰水城、云々。」大宰府管内志に曰く、「水城は美豆紀と訓む可し御笠郡水城村に在り、東西長五百間許あり、其間絶えたる処六十間許なり、東方の堤百五十間、或は百五十、西方の堤三百二十三間、堤高五間、根盤廿七間許ありと云ふ。

附記 御笠郡珂席田の三郡は合して今の筑紫郡となるなり

「水城関址」夫木集に、「筑紫へまかりけるに、府(大宰府)にいる日水城関に少貳府官などむかへに集み来りけるによめる

岩垣の水城の関にむれ向ふ

うちの心もしらぬもろ人

大貳高遠

とあるは是なり、

○大宰府の古趾、水城、関趾、都府棲趾、戒壇院及び観世音寺、皆

見下りぬ、

○天満宮 「飛梅」

東風吹かば匂おこせよ梅の花

あるじなして春な忘れそ

の詠忍ばれぬ、樹幹古けれども千年のものにあらず、思ふに後人の植ゑかへたるならん。社前の小池は其形心字状をなすといふ、側の

飛瀑を真の滝と呼ぶ。こは「心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらん」の歌意に法れるものか非か、誰學宋壁挫荆兵、不怪晋軒徐出旌、非餌孤城漁九国、老猴何得醒長鯨。

……………山陽 我(引用者注、四年野上)は梅林の間を彷彿ひつゝ思

ひぬ、晋公の薄命と其清節とを。嗚呼浸潤の讃、膺受の懇はよく耳に

入り易く、市に三虎の声に至人も心を動かすとかや。音信不美、美

言不真、世は忠臣斥けられて奸臣進む、常なるか。悲しいかな昨

は輔弼の臣として台鼎の高きに位したるに、今は冠をかけて西海の

配所に「独り腸を断つ。」窮達地を易へ榮辱道を分ち茲に左遷の辱

を享くるも、上天閻をへだて、冤を訴ふる由ぞなき。「海ならず

たゞよふ雲の底までも清き心は月ぞてらさん。」あゝ皎々たる天上

の明月これや、まことに公の心なりけらし。思ひあふれ感極まり、

終に一首を残して去る。

月かげはつひにてらさでやむべしや

よしくろくもの空にみつとも (野上)

○千代松原の夜景を探らばやとて。数人の少年の軍歌謡ひつゝ過ぎ行くに逢ひて、我等はこを呼び留めぬ。此原の名を聞かんとて

「此松原は何といふ処ですか。」

「千代の松原——元寇記念碑や日蓮様の像もあすこに出来てますじやありませんか」

「あー此が千代の松原であつたのか、そしてまだ違ひ続けているのか？」

「はア此処から箱崎サ一続いているんで……………箱崎までですかー

一里はかありません。」少年は此く応へて行き過ぎぬ。

(引用者注、「写真術」以外で口語体を用いているのはこゝらだ

が、方言もないし多分筆者によって意識的に再現されたものであらう。)行き／＼て箱崎の見ゆるやうなりし頃、我は又此松原に就きて、ゆくりなくも秀吉の佳詠を思ひ浮べぬ

あつき日に木の下かげに立ちよれば

波の音するまつ風ぞふく

猿面の偉人と仙骨の納子と林間に釜を擁して閑に清談をなし、時の様やいかに優なりし。千利休釜懸松、今も尚ほ行人をして英雄閑日月のおもかげを偲はしむるにあらざるや。此夜奥村先生より筑前地方一帯に於ける史跡の講話あり、(引用者注、このような講話は旅行中何度か行なわれたようである。)

○箱崎八幡宮

十一月三日、今日は天長節なり、「箱崎八幡宮」の本殿の傍に行き、東郷整列して天長節の祝賀式を行ふ。先づ田中先生の祝詞あり、次に喇叭手「君が代」の曲吹奏す……………

君がよの千代の松原あさたちて

きみのみあれを祝ふけふかな

(野上)

○箱崎——史を按ずるに宮崎はもと葦津といひしが応神天皇降誕の折、その御胞衣を納めたる宮を埋めまらせ、其上に標の松を植宮松と呼びけるより今の名に改めたるなり。八幡社殿は文永年中、豪古軍の爲め兵燹に罹りたれど、宮松の焼痕よりは二葉の芽生ひ出でたるぞ、やがて今の宮松なる。社殿の右の方の所にあり。幹は二抱にも餘りぬべし、二株に岐れて高く聳えたるに、朱柵を繞らして七五三縄結びたり。側に銅碑あり、其文に曰く……………千早ぶる神代にうゑし宮崎の松は久しきしるしなりけり。

古歌にいはいはく

幾代にかゝたりつたへん宮崎の
まつの千歳のひとつならねば

秀吉が征韓の折、此処に詣りてよめりといふ歌に
ちとせをもたゝみ入れおくはこさきの

松に花さくをりにあはゞや

正面の樓門は年ふりて老丹古碧の色残り、上には醍醐天皇の宸筆をふとめたる「敵国降伏」の古額を掲げたり、

「廟門崑崙面長燭 仰視雕題照碧湾

長倚神威伏戎狄 新羅高麗指揮間」 (頼山陽)

○赤間関

「長街如帯蘸波光 面々青山誰万櫓

莫怪潮頭駛於箭 徂門一出是玄洋」 (山陽)

これで旅行日誌の中からの抜粋を終る、この筆者たちは旅行記のために充分資料研究をしてきたであろうから、これがすべての中学生たちの知識だとはい決して言わないが、旅行記は研究発表のような退屈な部分もある一方、私にこんな旅行もやってみたいという気にさせる。地図でみてわかるように随分歩く。そろそろ冬も近いころであるが道中冷たい雨に降られたり、お弁当が腐って食べられなかったり、足が痛んできたりさんざん苦労する。彼らが汽車に乗り込んでホッとすると同時に、わたくしもほんとうに汽車の便利さを、彼らとともに感謝する。しかし彼らには決して悲壮感は見えない。たゞ「後の笑の種となりけり」である。そこには若い負けじの意気がある。十日間、自分の足で歩く旅行は、苦しいだろう。でも、苦しいなりに、自分の足で確かめ、かみしめた旅は印象も深い

ものがあるだろう。現在の修学旅行を思うとき、うらやましくさえある。彼らは史跡、名所の一つ一つに充分な時間と知識をもって、十分反応、吸収している。次々に名所をみせられて、帰ったら頭の中がゴチャ／＼で何をみたのかサッパリ、という旅行よりよほどまじである。

四、付 臼杵中学校について

最後に、気になることは、この文集の五年生の行方である。少し調べてみよう。

二豊社会科文庫第二集日本史対照「大分県郷土史年表」半田康夫著には、つぎのように出ている。昭和二十八年十月二十日

一八七六明治 九年十月二十四日 大分県師範学校開校

一八八五明治 一八年五月 大分中学校を高揚町にたてる

一八九四明治 二七年四月 大分尋常中学校の中津分校できる、

一八九七明治 三〇年四月 中津尋常中学校の分校を宇佐に

大分尋常中学校の分校を杵築、

臼杵、竹田におく

(明治三十三年独立)

この間の事情をもっとよく知るために「大分県教育五十年史」(大正十三年十二月二十五日大分県教育会発行)をみると、つぎのようなことがわかった。

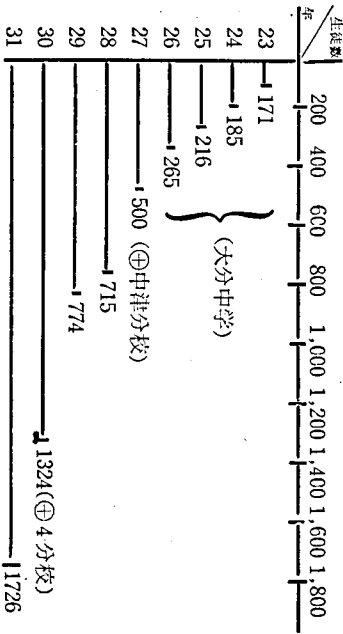
中学校令時代の中学校

明十九年四月九日中学校令(高等、尋常)

○尋常中学校 府県において便宜これを設しうるが、地方税の支弁または補助にかかるものは各府県に一か所、学科目、倫理、国語、

漢文、第一外国語、第二外国語、農業、地理、数学、博物、物理、化学、習字、図書、唱歌及び体操、ただし第二外国語と農業は便宜その一を欠くことができ、唱歌は当分課さなくもさしつかえないものとされた。(修業年限五年)

本県においては、この中学校令の発布によって町村立はことごとく廃止され、県立一校となった。二十一年初めて帽章を制定し、二十二年最初の卒業生三名を出した。(大分尋常中学校)二十五―二十七年校舍新築、二十八年には生徒数五〇〇名に達した。毎年入学志願者が激増する結果、多数の生徒を入学させたから、二十七年四月より中津に分校を設置した。この当時までは生徒の用いる教科書は学校から貸与したらしく、二十五年の記録によれば、大分尋常中学校の図書五九〇三部、冊数一三六一五冊とあるが、そのほとんど全部は教科書であった。二十五年初めて、特待生制度が実施された。明治三十年、志願者の激増に鑑みて中津分校を本校に引き直し、さらに杵築、臼杵、竹田(以上大分中学校の分校)宇佐(中津中学校の分校)の四分校を設立した。



種 年 度	学 級 数					教 員 数					生 徒 数						
	大	中	幷	田	竹	大	中	幷	田	竹	大	中	幷	田	竹	字	
明治33	11	10	8	8	8	18	17	17	15	15	15	470	410	258	249	257	293
34	11	10	9	9	8	19	18	17	14	15	15	425	424	294	288	266	349

明治三十二年 中学校令の改正

尋常中学→中学校

目的、男子に須要な高等普通教育を授ける。また、各府県には必ず一個以上の中学校を設置するものとし、必要と認めるときには文部大臣が増設を命ずることを得るものとした。

明治三十三年に四分校をおのおの独立させ、ここに本県には六校の県立中学を見るようになった。今、六校の学級数、教員数、生徒数を年度別に表示してみる。

こゝには明治三十三年、三十四年のところを書き出しておく。このように明治三十年に大分中学の分校として設立された臼杵中学では、三十三年には四年生までしかいなかったのである。

五、参考

なお、大分県立図書館では、このほかに五冊の校友会誌を見せていただいた。これらのうち二冊の目次を参考までに掲げておきたい。

1 大分県立第一高等女学校「校友会誌」第三十五号（昭和八年

三月二十八日発行）

○文苑（各学年）

五九

旅情 外八篇

鷹溝橋事件の真相

九

○詩 一年句集

一一九

皇民われら

九

○俳句 春夏秋冬抄

一一三

中津藩の武道

九

朝の露 五年句集

一一三

弓道論談

九

麦 三年句集

一一三

戦歿卒業生諸氏慰霊祭

九

批把の花 二年句集

一一三

○論 龍

九

鮎 一年句集

一一三

赫々たる武勲

九

○俳句 春夏秋冬抄

一一三

月十日発行）

九

○俳句 春夏秋冬抄

一一三

2 大分県立中津中学校「校友会誌」第五十九号（昭和十四年三

附録豊後方言集

二二

鶴見山に登りて

一六

曙覽の歌

一七

村をゑがく

一七

全学年より

二二

編集後記

一〇六

選出

二二

和歌 各学年

四三

生徒諸子に

一頁

俳句 各学年

七五

見聞所感

三

校友会部報

八九

母を語る

五

校友会決算報告

九四

言葉の变化

九

学校行事抄

一〇三

鶴見山に登りて

一六

校長

四三

曙覽の歌

一七

各学年

四三

村をゑがく

一七

各学年

七五

全学年より

二二

各学年

四三

選出

二二

各学年

四三

生徒諸子に

一頁

各学年

四三

見聞所感

三

各学年

七五

母を語る

五

各学年

七五

言葉の变化

九

各学年

七五

鶴見山に登りて

一六

各学年

四三

曙覽の歌

一七

各学年

四三

村をゑがく

一七

各学年

七五

○短歌

朝陽映島

各学年

一〇三

風鈴

五年詠草

露管の歌

四年詠草

ひとつもとの荷

三年詠草

栗の葉

一年詠草

勤勞奉仕

一二五

社会見学

一二八

校友会記事

一三一

校内記事

四九

表紙画

五年

中野真人

付記 資料借覧に便宜を与えてくださった大分県立図書館に深く

感謝申し上げます。